

鬼と かぐや姫



天見谷行人

鬼とかぐや姫

赤鬼がひとり、橋の上から三途の川を見下ろしていた。賽の河原では、人間達を釜茹でにするための紅蓮の炎が燃えている。川面は赤黒い血の色に染まっていた。やがて赤鬼は何を思ったか、金銀七宝で造られた橋の欄干によじ登った。赤鬼は眼を閉じて、ゆっくり深く息をした。その後、赤鬼の体はゆっくりと川面に吸い込まれるように落ちて行った。

ーバリバリ、ドスーン

身を引き千切られる様な痛みで、赤鬼は気を失った。

ほのかに蓮華の香りがする。それはどこか儂さの中に、高貴さを感じさせる、爽やかな香りだった。

ーまさか、ここは天上界かーそれにしては身体が痛い。赤鬼はうっすらと目を開けた。二匹の兎が見えた。どちらも烏帽子を被っている。かけ声をかけ、全身で踊るように杵を打ち振るい、一心不乱に餅をついていた。

「気がつきましたか」

小さな瑠璃の鈴が響く様な、愛らしい声がした。驚いた赤鬼は跳ね起きた。目の前にいたのは十四、五歳と思われる、光り輝くように美しい少女だった。彼女は長い着物を何枚か重ねて着ていた。その重なりあった袖口は、濃い緑から薄い緑へ、薄い緑から黄色へ、黄色から白へと変化している。その色目は、初夏へと移行行く季節にふさわしかった。

「あのう……ここは天上界ですか？」

腰を激しく打ち付けたらしい。赤鬼は腰をさすりながら少女に尋ねた。

「いいえ」少女は小さく首を振った。

赤鬼は辺りを見回した。自分が身を投げ出した橋は、遥か天空に微かに見えている。ここはまだ地獄だった。彼らは地獄の賽の河原にいたのだ。

「姫様、そのような者と関わりますと穢れがございますぞ」餅をついている片方の兎が声をかけた。

「もち丸、大丈夫ですよ。これがありますから」姫と呼ばれた少女は、胸元の御守袋をとりだしてみせた。彼女はもう片方の兎に声をかけた。

「ねえ、つき丸、あなたも久しぶりにお餅がつけて嬉しいでしょう？」兎は答えた。

「姫様、近頃は我らが月も、人間どもが騒がしゅうて、いけませぬなあ。それにしても、まさか地獄で餅のつき放題とは、わっはっはっ」つき丸と呼ばれた兎は、小躍りするように餅をついている。赤鬼はハツとした。

「もしや、あなたたちは、月の……」

「ええ、あれに乗って来たの」

姫が振り返った先には、竹を網代に編み上げた見事な牛車が留っていた。

「今日は牛車の試し乗りをしていたの」

すると、もち丸と呼ばれた兎が口を挟んだ。

「下ろしたての新車ですぞ。それをまあ、こいつめ、こんな姿にしてしまいおって」と赤鬼を睨

んだ。改めて牛車を見てみると、その天井には、ぽっかりと穴が空いている。

「せっかくの試し乗りだから、地獄巡りをしてたのよ。そしたら、いきなり鬼が落っこちてくるんだもの、びっくりしたわ」

赤鬼は深々と頭を垂れた。

「すみません、なんで私はこんなにも不器用なのか……自分の命さえ絶つ事も出来ない」そう言って赤鬼はワッと泣き始めた。姫は赤鬼を不思議そうに見つめた。赤鬼は嗚咽しながら話し始めた。

「地上界の小さな村へ出張した折りの事です。もう村には田植えをする者がいないと、老人が悲しんでおりました。私は見かねて、田植えを手伝ってやったのです。すると老人はお礼にと酒を振る舞ってくれました。しかし私は下戸なのです。すっかり悪酔いしてしまいました。赤鬼である私が、真っ青な顔をして地獄に戻りましたところ、上司の青鬼に見つかってしまったのです」

「あなた、運も悪いのね」姫の言葉に、赤鬼はちょっと言葉が詰まった。

「上司の青鬼は私の顔を見るなり、いつもは青い顔を、真っ赤にして怒り始めました。正に鬼の形相です。『お前は何をやらせてもだめな鬼だ』と言われました。確かに同期生の鬼達は、墨縄や、L型定規、槍かん、のこぎり等を使って、人間を上手に捌いてみせるのです。でも私は、今だに墨縄ひとつ、うまく扱えないのです」

もち丸とつき丸は餅をつき終わっていた。高杯に丸めた餅を載せている。河原のあちこちには、地獄で暮らす子供らが積み上げた、積み石があった。もち丸とつき丸は、それらの積み石の前に餅を供えていった。やがて赤鬼の傍に来て、餅を食べるように勧めた。

赤鬼は丸餅をひとつ口に入れた。なぜか心がしんと静まり返るようだった。

「あなた、まだお若いのでしょうか？」姫が尋ねる。

「はい、先日、二百歳になったばかりです」

「なぜ身を投げたりしたの？」姫はまっすぐ赤鬼の眼を見つめた。赤鬼も涙眼で姫を見つめた。

「姫様、私は鬼のくせに笑顔しか取り柄がないのです。鬼の仕事は、地獄に堕ちて来た人間達を怖がらせることです。それが私にはどうしても出来ません。人間達は私にすがりつくのです。助けてくれと泣きわめくのです。私が笑顔を見せて安心させてやると、先輩の鬼達がやって来て、人間をむしり取り、切り刻み、地獄の釜に放り込みます。私はぼんやり見ているだけです。私は本当に不器用で何も出来ない鬼なのです。笑顔しか取り柄のない鬼の命なんか…… それこそ、蟻一匹の命の方が貴いかもしれません」

姫は澄んだ瞳で赤鬼を見つめた。

「では赤鬼さん、あなたにお訊きします。蟻より軽い、あなたの命は、この地獄の人間たちを無限に苦しめましたか？ 幾千の人間たちの死の苦しみは、蟻より軽いとでも言うのですか？」

「私は、わたしは……」

赤鬼はこらえきれず、ワッと泣き出し、地面にひれ伏した。「私は笑顔しか能のない、出来損ないの鬼として生きるしかないのです」泣きじゃくる鬼を前に姫は何か思案していたが、やがて持っていた扇をゆっくりと広げた。すると扇から、おぼろげに渦の様な気配が立ち上った。や

がて姫の持つ扇の上に、恰幅のよい脂ぎった顔をした年配の男性が現れた。

「晴明さん、あなたにお願いがあるのです」

「何なりとお申し付け下さいませ、姫様」

安倍晴明は自信たっぷりに扇の上で胸を反らせている。姫は小声で何事かを話した。とたんに安倍晴明の顔が曇った。

「それは難しゅうございますなあ」と考え込んでいる。やがて何か思いついたらしい。ポンと手を打ち「では、こういたしましょう」と姫にささやいた。「なお、あの方には、私の方からお願いしておきますので。姫様これにて失礼致します」

安倍晴明の姿が煙のように消えると、姫は扇をゆっくりと閉じた。そして情けない姿の赤鬼に、キツとした瞳を向けた。

「赤鬼さん、あなた鬼として生きるのね？」

思わぬ強い口調の姫の言葉に、赤鬼はハッと顔を上げた。

「もち丸、つき丸、あの者をここへ連れて来なさい」姫は扇で、河原の向こうを指し示した。やがて、もち丸とつき丸は、一人の痩せこけた、はだかの老人を連れて来た。

「赤鬼さん、このおじいさんを殺しなさい」

姫は錦の袋から短刀を取り出し、赤鬼に突きつけた。「この守り刀で殺しなさい」

赤鬼は震える手で短刀を受け取った。おろおろと老人の前に歩み出た。彼は柄を握り、諦めたように鞘から短刀を引き抜いた。ぎらりと抜き身が光る。赤鬼は老人の肩をつかんだ。短刀を持つ右手が、わなわなと震える。それでも彼は、刀を持った右手を頭上高く持ち上げた。その時だった。

「あっ、あなたは」

赤鬼は老人の顔を見て驚いた。目の前の老人は、あの田植えを手伝ってやった老人だった。「どうしてあなたが地獄へ」と尋ねても老人は答える気力もないほどに弱り切っていた。そこへ、赤鬼の背中にかぐや姫が、あらん限りの声で罵声を浴びせかけた。

「さあ、どうしたのです、あなた赤鬼でしょう。ひと思いに殺しておしまいなさい」

赤鬼は泣いた。その赤い頬は涙で濡れた。「そうだ、わたしは赤鬼だ。今まで幾千のいのちを殺める事に手を貸して来た、私は赤鬼だ」赤鬼は老人を見つめた。そして力の限り満面の笑みを浮かべた。彼のたったひとつの取り柄だった。彼は笑顔で泣いた。

「ほら、怖くないでしょう。すぐ済みますからね」そう言って赤鬼は渾身の力を振り絞った。「えいっ」刀を老人めがけて振り下ろした。次の瞬間、刀は宙を舞った。老人が消えた。勢い余って赤鬼は転がった。ふと傍らを見ると、さっきまで老人のいたところに、仏像が一体立っている。仏像は眩いばかりの金色に光り輝いていた。かぐや姫は微笑んで膝をつき、その仏像に両手をあわせた。

「帝釈天様、ありがとうございます」

帝釈天様は、かぐや姫に声をかけた。

「姫、もうよろしかろう。月へ戻りなさい。この赤鬼は私が見守りましょう」

かぐや姫は両手を合わせたまま、静かにうなずいた。やがて、帰りの牛車に向かって歩き始め

た姫は、一度歩みを止め、振り返った。赤鬼はまた泣きべそをかいている。かぐや姫は赤鬼に声をかけた。

「鬼の笑顔にも、きっと価値はありますわ」

かぐや姫を乗せた牛車は白い雲に載って、ふわりと天空へ昇った。牛車が去った賽の河原には、爽やかな初夏を思わせる蓮華の香りが漂っていた。赤鬼は、どこか儂さをたたえた残り香を、いつまでも、いつまでも聞いていた。（了）

—この作品を亡きY君に捧げる— 天見谷行人

鬼とかぐや姫

<http://p.booklog.jp/book/73698>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73698>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73698>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ